

これでわかる「敬意」の対象

西荻塾 書き下ろし

横書きで失礼するが、このプリントをバイブルとしてほしい。

【公式】敬意の対象

①地の文の場合

尊敬語 … 筆者 → 動作をする者
謙譲語 … 筆者 → 動作を受ける者
丁寧語 … 筆者 → 読者

②会話文の場合

尊敬語 … 話し手 → 動作をする者
謙譲語 … 話し手 → 動作を受ける者
丁寧語 … 話し手 → 聞き手

●公式の説明

1. 尊敬語

まず、動作をする者が身分が高い場合、筆者（あるいは話し手）は、尊敬語を用いて「動作主」に敬意を払う。つまり、尊敬語は「誰が」に対する敬意なのである。

★尊敬語は、動作をする者に対する敬意

天皇がくまモンに会う。

→天皇が、くまモンにお会いになる。

「会うという動作をする張本人である天皇に対する敬意」

2. 謙譲語

これに対して、動作をする者は身分が高くなく、その動作を受ける者が身分が高い場合、筆者（あるいは話し手）は、謙譲語を用いて敬意を払う。つまり、謙譲語は「誰に」に対する敬意なのである。

謙譲語は、動作を受ける者

くまモンが、天皇に馬刺しをプレゼントする。

→くまモンが、天皇に馬刺しを差し上げる。

「馬刺しのもらい手は、天皇である」

もらい手＝動作を受ける者だから、これも天皇に対する敬意

3. 丁寧語

また、身分関係と無関係に、「筆者→読者」,「話し手→聞き手」への敬意を払う語が、丁寧語になる。

本日は晴天なり。

→今日は、お天気が大変よろしいですね。

「お」天気=丁寧語、よろしいですね=丁寧語

どちらも、書いてある文なら読み手へ、会話文なら聞き手に対する敬意である。

敬語の特殊な使い方

● 2方向への敬意【重要！！！！】

1つの動作に対して、動作をする者と動作を受ける者への両者に対して、同時に敬意を表す。この敬語表現は、筆者（あるいは話し手）にとって、その動作をする者と動作を受ける者とが、ともに敬わなければならない時に用いる。

[例1] (かぐや姫は) いみじく静かに、公に御文奉りたまふ。 [竹取物語]

現代語訳：(かぐや姫は) たいそう静かに、天皇にお手紙を差し上げなさる。

★ この例では、

”かぐや姫が天皇にお手紙を出す”という一つの動作について、
「奉り」、「たまふ」という2つの敬語が用いられている。

こうすることで、

動作をする者であるかぐや姫 by たまふ

動作を受ける者である by 奉る

かぐや姫、天皇の両方に対して同時に敬意を表しているのである。

奉り … 本動詞としての用法。「与ふ」の謙讓語。物語の筆者が
お手紙を出したかぐや姫を低めることによって、お手紙を
受け取る天皇を敬った表現。

たまふ … 補助動詞としての用法。尊敬語。物語の筆者が、天皇に
手紙を出すかぐや姫を敬った表現。

[例2] (北山の僧都が尼君に話しかけている会話文)

「この世にののしりたまふ光源氏、

かかるついでに見たてまつりたまはむや」 [源氏物語]

現代語訳：「この世に評判の高くていらっしゃる光源氏様を、
このようなついでに見申し上げなさいませんか。」

★ この例では、動作をする者は尼君で、動作を受ける者は光源氏である。

たてまつり … 「見る」という動詞についての補助動詞。謙譲語。

僧都が尼君に言った会話文に用いられているので、話し手である僧都が、「見る」という動作をする者である尼君を低めることによって、動作を受ける者である源氏を敬った表現。

たまは … 尊敬の補助動詞で、話し手の僧都が動作をする者である尼君を敬った表現。

● 二重尊敬

尊敬の言葉を2つ重ねて用い、動作をする者に対して特別高い敬意を表す。

[例] (帝が) 御覧じて、いみじう驚かせたまふ。 [枕草子]

現代語訳：(帝が) ご覧になって、ひどく驚きになる。

★ この例では、「せ」という尊敬の助動詞と「たまふ」という尊敬の補助動詞が二つ重ねて用いられている。

注) 会話文の中では、身分の高くない人に対しても、この表現を用いることがある。これは話し手が、話題にのぼらせる人物を重要視して敬うことがあるからなのだ。

● 自敬表現

天皇などの高貴な身分の人が、自分自身を高めるために用いる表現で、

- ・ 自分の動作に尊敬語を用いる場合
- ・ 相手や第三者の動作に謙譲語を用いる場合

とがある。

[例] (帝は)「① 汝が持ちてはべるかぐや姫奉れ。

② 顔かたちよしと聞こしめして、

③ 御使ひを賜ひしかど、かいなく見えずなりにけり」と

(翁に) 仰せらる。

[竹取物語]

現代語訳：(帝は)

「① お前が持っているかぐや姫を献上せよ。

- ② 容貌が優れていると聞いて、
③ 御使いをつかわしたが、その甲斐もなく会う事ができなかった」と
(翁に)仰る。

★ この例で、天皇は、竹取の翁に語るのに、
自己の行為に、尊敬語(②の「聞こしめし」及び③の「賜ひ」)を用いて、
相手である翁の行為に、謙讓語(①の「奉れ」)を用いている。
これらはすべて、天皇から天皇自身に対する敬意の表現である。

チェックテスト

【問】次の一節について、①～⑨に示された箇所につき、敬語に着目して文法的に説明せよ。

四条の大納言のかく何事も優れ、めでたく①おはしますを、大入道殿、「いかでかかからむ。うらやましくもあるかな。わが子どもの、影だに踏むべくもあらぬこそ口惜しけれ」と②申させたまひければ、中関白殿・粟田殿などは、げにさもとや③思すらむと、恥づかしげなる④御気色にて、ものも⑤のたまはぬに、この入道殿は、いと若く⑥おはします御身にて、「影をば踏まで、面(顔)をや踏まぬ」とこそ⑦仰せられけれ。まことにこそさ⑧おはしますめれ。内大臣殿をだに、近くてえ見⑨たてまつりたまはぬよ。

※参考：四条大納言(おじさん、藤原公任)、大入道殿(道長の親父、藤原兼家)
中関白殿・粟田殿(道長の兄貴たち)、入道殿(道長本人)
出典：「大鏡」